朝鮮における金属器の起源問題

西谷正

【要約】朝鮮に金属器が出現するのは、櫛歯文土器文化に継起した、コマ形ないし無文土器文化においてである。青銅器を主とするとはいえ、鉄器も遠からず使用した。青銅器の製作は、当初から行なわれていた可能性が強い。しかし、青銅器を模倣した石製品の豊富なことは、金属器が容易に普遍化しなかったことを意味する。ところで、金属器成立の背景には、遠く中国の新石器文化の影響を受けて成立した、農耕を主要な生産部門とする社会が、遼河流域を中心とした広大な地域に存在し、金属器に裏づけられた遊牧的な社会との交渉を通じて金属器を受容していった歴史的諸条件がある。すなわち、コマ形土器あるいは無文土器文化における内在的な発展が、櫛歯文土器文化以来の、内蒙古・遼河流域との共通の文化的基盤に立ちつつ、新たな中原と北方地方の情勢の変化を契機として、金属器の出現をもたらしたのである。それは、中国の春秋前半すなわち西暦紀元前七～八世紀を上限とし、戦国つまり西暦紀元前三～五世紀にかけてのことである。朝鮮における金属器受容の外的条件としてもかかわってくる。

史林　五〇巻六号　一九六七年一一月

一　はじめに

筆者はさきに、日本の弥生文化成立の外的諸条件を解明するための試企として、朝鮮におけるいわゆる土壙墓や、その副葬遺物である金属器の分析を行なったことがある。[1]そこでは、いわば朝鮮における初期金属器の発展の問題を取り扱った。すなわち、西鮮を中心として、原始共同体社会にあって、支配者としての性格を強めつつあった土着豪族層は、自らの地位を、楽浪郡県の官人化への道を歩むことによって、一層強固なものとしていった。そして、彼らが死するや、中国風の土壙墓を築き、各種の金属器を副葬した。そこにおいては、土壙墓被葬者の生前における金属器所有の集中性がうかがわれたのであった。

ここでは、弥生文化における金属器受容の背景を考察し

たいという同じような動機に立って、朝鮮における金属器の起源問題を考えてみたい。もとより、弥生時代に金属器が、朝鮮半島から受容されるとした場合、その背景には、縄文時代に内在する条件に加えて、その時代に対応する朝鮮の原始ないし古代社会における内在的発展と有機的に関連するものである。この意味で、朝鮮における金属器の出現やその後の発展の状況が問題になってくるわけである。

そこで、朝鮮の金属器について、(1)出現当時、どんなものがあるか (2)どんなあり方をしているか、とりわけ、金属器の所属文化の問題やその実態について、また、青銅器時代の設定は果して可能なのか (3)どうして出現するか、そして最後に、(4)いつごろのことなのかなどの諸問題について考えていきたい。

① 西谷正「朝鮮におけるいわゆる土壙墓と初期金属器について」(『考古学研究』第一三巻第二号) 一九六六、岡山。

二 金属器出現の背景

朝鮮における人類文化の起源が、旧石器時代に遡るか否かという問題に対する関心は古く、多くの人たちによって追求されてきた。解放後、朝鮮人学者の熱烈な調査・研究を通じて、旧石器時代の存在が提唱され、また、中石器時代の設定も想起されている。しかし、まだ、二、三ヵ所の遺跡の発見にすぎず、詳しいことはわからない現状にある。

新石器時代の段階にはいると、事情は異なる。解放前の日本人学者の蓄積に加えて、解放後の朝鮮人学者によるめざましい調査をもって、かなり細かい実態が明らかになってきている。この時代の土器は、櫛歯文土器あるいは櫛目文土器といわれる。金用玕博士によれば、[1] この櫛歯文土器は、形態や文様によって地域的分布を異にし、随伴する文化内容も相違する点が多い。すなわち、弓山里・智塔里遺跡など西海岸一帯では、長卵形櫛歯文土器が特徴で、弓山文化と名づけられている。そして、この弓山文化には、第一期から第二期への変化過程が指摘されていて、その後期には波状点線文が伴なう。弓山文化の遺跡は、平安北道・平安南道・黄海南道・京畿道一帯で知られている。これに対して、咸鏡北道一帯の遺跡では、櫛歯文系の文様がみられるが、器形はすべて平底である。後期に波状点線文を伴なわないかわりに雷文や螺旋文を伴出している。石器を例

にとってみても、長卵形櫛歯文土器には、整美な磨製石器を伴なうが、平底櫛歯文土器には、磨製あるいは半磨製の石器も僅少で、形の整わないもので、かえって、黒耀石製の打製石器が卓越している。平底櫛歯文土器は、形態が平底で鉢形であることや、文様に雷文があることなどにおいて、沿海州地方と密接な関係を有している。一方また、土器の文様や形態のほか、すりうす・打製石鍬や黒耀石製打製石器などの点で、内蒙古自治区林西県一帯に分布する細石器文化との関連も密接である。[2]

内蒙古の細石器文化は、それが咸鏡北道一帯の平底櫛歯文土器文化に対して与えた影響の濃厚さに較べるとやや薄いが、西海岸の長卵形櫛歯文土器文化（＝弓山文化）へも影響を与えたことは推定される。すなわち、内蒙古細石器文化に特徴的なすりうすが[3]西鮮でも認められること、弓山文化第二期に伴出する波状点線文に類似の波状文が内蒙古で見られることなどがそれである。[4]内蒙古細石器文化の土器には隆起文や連続弧線文などがみられる。朝鮮では、隆起文が櫛歯文系土器文化の後期あるいは末期のものといわれるが、さらに、羅津草島や会寧五洞など、櫛歯文系の遺跡より新しい段階の遺跡において無文土器とも伴出する。西鮮でも、たとえば、平壌特別市勝湖区金難里では、隆起文の土器が弓山文化最末期の変種である把手のついた櫛歯文土器と同じ層から出土している。[5]内蒙古細石器文化において、隆起文や連続弧線文と共存する、すりうすや黒耀石製打製石器・打製T字形石鍬などは、咸鏡北道一帯の無文土器文化[6]にまで遺存している。このように見てくると、内蒙古細石器文化[7]の朝鮮への影響は、櫛歯文土器文化でも後出の段階に始まり、咸鏡北道一帯では、無文土器文化まで遺存したものであったと考えられる。

要するところ、ほぼ全鮮に分布する櫛歯文土器文化のうち、咸鏡北道一帯の平底櫛歯文土器文化と西海岸一帯の長卵形櫛歯文土器文化の二つの地域性が摘出しうるわけである。その後期の段階すなわち[8]雷文・螺旋文や波状点線文を共伴する頃に、内蒙古細石器文化との接触をもったが、わけても咸鏡道一帯の平底櫛歯文土器文化との親縁性は濃厚であった。平底櫛歯文土器文化には、内蒙古細石器文化とともに、沿海州方面との関連があったが、長卵形櫛歯文土器文化には、内蒙古細石器文化との類似性しか指摘できな

い。ただし、平安北道塩州郡道峰里[9]や平安北道定州郡大山里堂山遺跡[10]では、櫛歯文系土器の本来的なものとは相異するが、硬質の赭褐色磨研土器に雷文が認められる。平底櫛歯文土器文化の影響が平安北道の海岸地帯まで及んでいることがわかる。この間の事情は、同じような丘陵ないし高原地帯という自然的条件に相応した狩猟・漁撈の経済、さらにそれを補足するような形での原始農耕[11]という共通の基盤によったためであろう。それにしても、長卵形と平底櫛歯文土器文化の二類型の相違は、単に自然地理条件の差のみに帰せられない問題を含んでいようが、この点については今後の研究に譲りたい。

① 以下の記述は、金用玕（李進熙訳）「美松里遺蹟の考古学上の位置――年代論を中心として――」（『考古学雑誌』第五〇巻第一号、一九六四、東京）に負う所が多かった。

② 内蒙古自治区文化局文物工作組「内蒙古自治区発現的細石器文化遺址」（『考古学報』一九五七年第一期）北京。

③ 有光教一「朝鮮石器時代の「すりうす」」（『史林』第三五巻第四号）一九五三、京都。

④ 金用玕「前掲書」六〇頁。

⑤ 金用玕「前掲書」六三頁。

⑥ 朝鮮民主主義人民共和国科学院考古学及民俗学研究所（以下、朝鮮科学院考古学研究所と略す）『会寧五洞原始遺跡発掘報告』（『遺跡発掘報告』第七集）一九六〇、ピョンヤン。

⑦ 中国科学院考古研究所内蒙古工作隊「内蒙古巴林左旗富河溝門遺址発掘簡報」（『考古』一九六四年第一期）北京。

⑧ 都宥浩博士は、雷文の年代に関して、波状点線文の時代に該当するものと考えている（都宥浩（鄭漢徳訳）「朝鮮原始考古学（三）」『考古学研究』第一二巻第二号、三三頁、一九六五、岡山）。

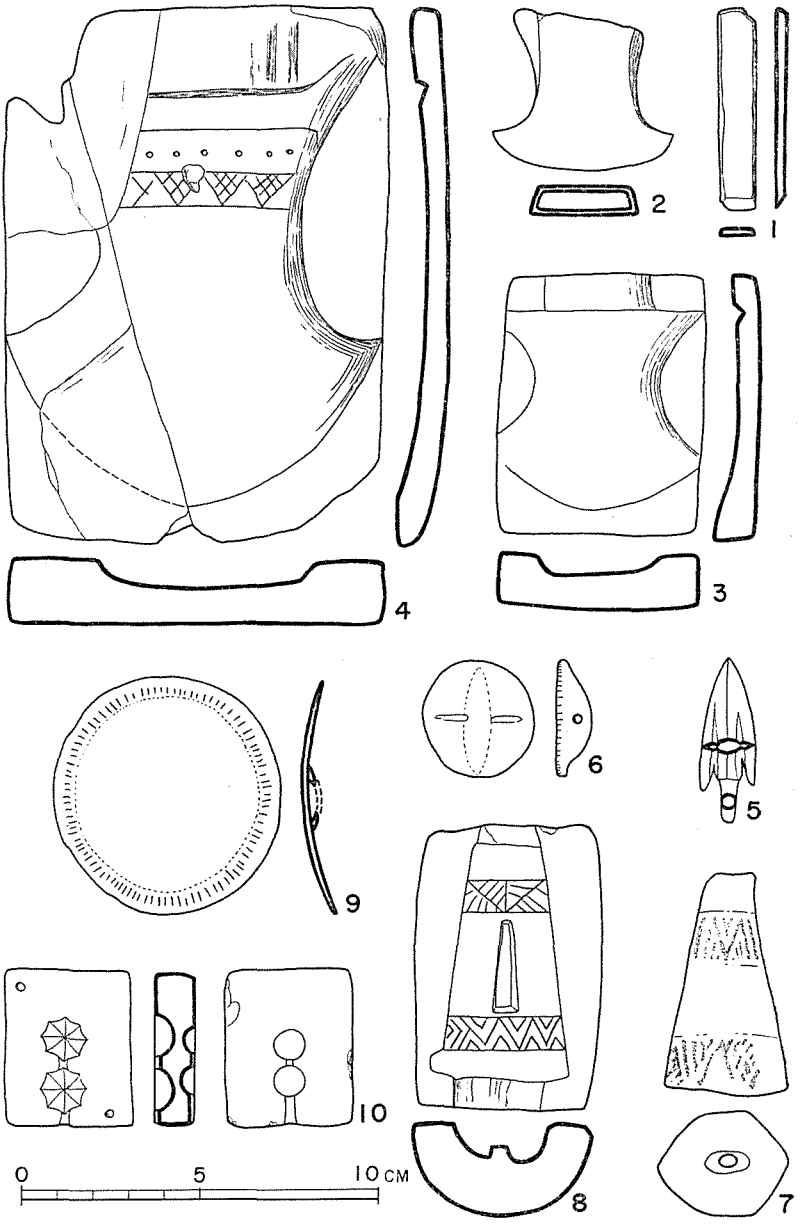
⑨ 李炳善「平安北道龍川郡、塩州郡一帯の遺跡踏査報告」（『文化遺産』一九六二年一号、五五頁）ピョンヤン。

⑩ 都宥浩「前掲書」二五・三三頁。このほか、平安北道龍川郡双鶴里でも、雷文が認められる。

⑪ 有光教一博士は、『朝鮮櫛目文土器の研究』（『京都大学文学部考古学叢書』第三冊、七八頁、一九六二、京都）において、「穀類耕作の証拠となる遺物（すりうす・穀粒の発見・石鎌・石犂・石鍬――西谷注）は櫛目文土器のなかでも、後出の種類と共存する」ことを指摘したが、私は、そのような初期農耕を内蒙古細石器文化との関連で考えたい。もちろん、自然経済の段階において、一定の自然資源に対して、増大する人口圧との矛盾が、新しく生産経済へと移行させる主体的条件であると考えるが、開墾―耕作―収穫―調理の一環した大陸系石器の出現は、やはり外的なものと考える方が自然であろう。

三　初期金属器の資料

朝鮮における金属器の起源問題の本論にはいるまえに、初期金属器の資料を紹介したい。起源を論じる場合、最古の形式を摘出しなければならないが、詳細な編年が確立し



青銅器関係遺物実測図

ていない現状にあるため、それが困難である。ここでは、青銅器や鉄器が多量化する前段階である新石器文化に関連する資料を選んで考える。まず、青銅器から見ていこう。

(1)平安南道勝湖郡金灘里遺跡第八号住居跡から銅鑿（図1）が出土した。[1] この遺跡は、表土が薄いので、後世の混入とみるむきもあるが、銅鑿が炉跡のそばで、焼けた磨製紡錘車・半月刀（石庖丁）・石鏃とともに発見されたもので、のちの混入とはみられないといわれる。この銅鑿は、長さ五・七cm、幅一・二cm、厚さ〇・四cmであって、一端には片刃がついている。質はきわめて悪く、全面に緑色の錆がみられる。[2]

(2)平安北道義州邑美松里遺跡のコマ形土器を出す上層では銅斧（図2）が出土し、磨製石鏃・石鑿・碧玉製管玉・石製紡錘車を伴出した。青銅斧は、発掘の過程で、銎の部分が一部欠け、現在、稜線から刃までが四・五cmの小形の銎斧である。刃の両端が朝鮮のタビの爪先にあたる部分のように尖っている。[3]

(3)咸鏡南道永興郡永興邑遺跡で採集された遺物のなかに、美松里出土の銅斧と同形式の斧笵（図3・4）がある。[4] 鋳型は大小二個ある。大きいものは、長さが一五cm、幅が一〇・五cm、厚さが一・八cmの灰白色をした滑石製である。斧の形態は、刃の両端が朝鮮足袋の先のように尖っている。刃の幅は一〇・五cmである。上端から刃までの長さは一二cm程度である。上端から一cm離れて、一cm間隔に三本の平行線を横に引き、上の間隔には一cm未満の間隔で、穴をくぼませて装飾としている。下の間隔には鋸歯文を引き、その各々の中を、平行線で交叉させている。鋳型内部は黒く焼けている。もう一つの鋳型は、長さが七・五cm、幅五・七cm、厚さ一・五cm程度の大きさをもつ青灰色の滑石製である。上端から刃までの長さは六cm、刃の幅は五・五cm程度の小さいものである。美松里出土の斧と酷似する形態である。二つの鋳型はともに上端の方に湯口があるようである。

銅斧の例は、ほかに、黄海北道鳳山郡松山里の配石墓から、多鈕細線文鏡・銅鏃・銅鑿・銅鉇・細形銅剣・鉄斧とともに出土している。[5] この銅斧は、銎をもち、上端に隆起帯をめぐらし、長楕円形の刃部をもつものである。慶尚北道大邱市北区西辺洞発見の有肩の直線刃をもつ銅斧[6]とともに、美松里例や永興邑例とは異なる形式である。

(4)黄海北道沙里院市上梅里遺跡の石棺墓から、銅鏃（図5）が磨製石鏃・有孔海螺殻とともに発見されている。[7] 銅鏃は、全長が四・六cm、茎部の長さ一・二cm、鋒部の幅一・五cm、鋒部の厚さ〇・四cm、茎部の太さ〇・五cm～〇・七cmである。青銅製で、青い緑青が出ているが完全である。有茎両翼鏃の典型的なもので、鏑線が走って、両面に血溝がある。断面は屈折した菱形をしている。石棺からの出土品として非常に稀有な遺物の一つである。

(5)慶尚南道金海郡長有面茂溪里の南方式支石墓から、銅鏃破片三個[8]が、石剣・石鏃などとともに出土した。支石墓から銅利器が、しかも石剣や石鏃と伴出した確実な例として注目される。[9] 銅鏃の形式は、有茎の両翼鏃である。

(6)江原道高城郡杆城面巨津里の新石器時代遺物の散布する砂丘遺跡で採集された滑石製の銅鏃鎔笵は、[10] 上梅里例や茂溪里例にみる両翼鏃の鋳造に用いられたものである。

朝鮮から出土する銅鏃には、ほかに、慈江道渭原郡崇正面龍淵労働者区で、古く、明刀銭や各種鉄器と出土したものをはじめ、いわゆる土壙墓や楽浪漢墓から出土するものがあるが、いずれも、三角形鏃もしくは三稜形鏃といわれるものである。この種の型式の銅鏃鎔笵は、平安北道寧辺郡梧里面細竹里[11]で出土している。ともに、上梅里・茂溪里・巨津里の諸例とは異なる型式である。江原道江陵市浦南洞の断面扁八角形の銅鏃[12]も稀に見る型式であるが、無文土器に伴なっている。

細形銅剣については、単独の出土数は、三〇〇本を優に超過するであろうが、遺構や共存遺物の関係がわかるのは、いわゆる土壙墓においてである。土壙墓は、明らかに中国の漢の影響を受けたものであるが、それ以前から細形銅剣は出現していると考えられる。すなわち、土壙墓よりも年代的に古い支石墓や石棺墓における銅剣の出現の問題である。

(7)黄海北道瑞興郡泉谷里遺跡の石棺墓では、細形銅剣が磨製石鏃とともに出土した。[13] 朝鮮で、石棺墓から細形銅剣が発見された確実な例として、はじめてのことである。また、黄海北道鳳山郡御水区支石山の支石墓から出た細形銅剣がある。[14] 支石墓から銅剣が出た例として重要である。

銅剣の製作に関しては、鎔笵によってうかがわれる。

(8)平安南道大同郡栗里面将泉里では、古く銅剣鎔笵二

個と鐸金具鎔笵一個が出土している。[15] 銅剣鎔笵は滑石製である。長さは、大きい方が三一・二八cm、小さい方が二九・五三cmであるが、脊と刃ともに節をもたないのが特徴である。

(9)京畿道龍仁郡慕賢面草芙里の無文土器の散布する地点で、細形銅剣鎔笵二個が発見された。[16] 鎔笵は滑石製で、その大きさは、将泉里例より少し小さいが、刃には節がくりこまれている。

(10)慈江道時中郡豊龍里遺跡の箱式石棺墓からは、銅泡が出土した。棺内からはほかに、美松里と同じ把手のついた広口壺や碧玉製管玉・紅瑪瑙製小玉・磨製石鏃・球形有孔石器を伴出した。[17] 銅泡は、[18] 直径約三cmの円形で、外湾した表面の周囲に刻み目を入れている。裏面には装着のための環がある。

(11)黄海北道鳳山郡鳳山邑新興洞遺跡の第七号住居跡からは銅泡が、石剣・石斧・石鏃・石貨・砥石・コマ形土器などとともに出土した。[19]

(12)咸鏡北道羅津市草島遺跡の第一発掘地第九穴の深さ五〇cmほどのところから、銅泡（図9）といっしょに銅鐸（図7）が出土した。鐸の高さは七cmである。長径は、上部が一cm、下部が四cmであり、短径は、上部が〇・六cm、下部が二・五cmである。厚さは〇・二cmくらいになる。中ほどより少し上に、幅一・五cmの文様帯がある。すなわち、横に鋸歯文状の脹らみあがった幾条かの線文様がある。下端でも、一・五cmほどの幅で、同様の文様帯を横につけている。この鐸頂には錆びて開いたのか、故意に開けたものかは不明であるが、孔が不規則に開いている。[20]

(13)咸鏡南道永興郡永興邑遺跡で採集された銅鐸鎔笵（図8）は、羅津草島の銅鐸と、大きさ・文様構成などにおいて酷似する。[21]

(14)慈江道江界市公貴里遺跡の第四号住居跡内の東北隅の、地表から少し下のところで、青銅の小片が黒耀石製の石器といっしょに発見されているが、詳細は不明である。[22]

次に、鉄器について見てみよう。朝鮮考古学界では、このコマ形土器の時代を青銅器時代とし、次の剣矛文化をもって鉄器時代と想定し、そこに青銅器から鉄器時代へという継起的発展をみようとしている。したがって、青銅器時代に入いるコマ形土器文化における鉄器の問題については

発言が少なく、鉄器の存在を積極的に肯定したものはないように思われる。しかし、鉄器が早くから使用された痕跡がないわけではない。たとえば、コマ形土器文化に平行すると考えられる咸鏡北道会寧郡会寧邑五洞遺跡の最上層の第六号住居跡から二個の鋳造の鉄鑿斧片が出土している。この遺跡は大部分コマ形土器併行の無文土器を出土し、小量の有文土器を検出している。報告者は、第六号住居跡を鉄器が出土したことにより鉄器時代に、そのほかの第四号・第五号・第八号住居跡を青銅器時代に比定している。[22] 第六号住居跡からは、無文土器・鉄器・白玉製指環・有孔石器が出土している。報告者は、鉄器の検出から、このような遺物綜態が初期鉄器時代的なものであっても、青銅器時代及びそれ以前の遺跡では見られないとしている。しかし、乳房頭状の把手を有する無文土器や有孔石器は、咸鏡道の新石器時代遺跡からしばしば発見されるものであるので、コマ形土器併行の無文土器文化のものと考えて差しつかえなく、あえて鉄器時代のものという言い方で、年代を新しく比定する根拠は薄い。また、慈江道時中郡豊龍里石棺墓と、遺跡の構造や遺物のみならず、文化的性格においても共通性の認められる吉林省騒達溝山咀子一号棺から出土した銅泡には、鉄銹をもつもの一個があり、さらに、鉄器破片一個も発見されている。[23] この山咀子石棺墓での鉄器使用の痕跡の事実については、朝鮮人学者の評価は低い。しかし、さきにあげたわずかに遺存した痕跡から、私は、青銅器の初現よりも遅れるとはいえ、かなり早くから鉄器がすでに知られていたことを推定しておきたい。

① これについてノミ状銅器といわれているが、多くの討論が行なわれた結果、ノミであることに意見が一致したといわれる（李進熙「戦後の朝鮮考古学の発展―初期金属文化期―」『考古学雑誌』第四五巻第一号、五七頁、一九五九、東京）。鑿としての機能を果した扁平片刃石斧との関連が考えられよう。

② 李熙進「前掲書」五七頁。

③ 金用玕（李進熙訳）「美松里遺蹟の考古学上の位置―年代論を中心として―」（『考古学雑誌』第五〇巻第一号、六四～六五頁）一九六四、東京。

④ 徐国泰「永興邑遺跡に関する報告」（『考古民俗』一九六五年二号、四二頁）ピョンヤン。

⑤ 黄基徳「一九五八年春夏期御池洞地区概況工事区域遺跡整理簡略報告」（『文化遺産』一九五九年一号、四八～五二頁）ピョンヤン。

⑥ 尹武炳「大邱発見の青銅斧」（『考古美術』第五巻第六・七号、三～五頁）一九六四、ソウル。

⑦ 朝鮮科学院考古学研究所『大同江及載寧江流域古墳発掘報告』（『考古学資料集』第二集、四一頁、一九五九、ピョンヤン。

⑧ 有光教一博士は、銅鏃二、銅剣一としている（有光教一「朝鮮初期金属文化に関する新資料の紹介と考察」『史林』第四八巻第二号、一二四頁、一九六五、京都）。

⑨ 金元龍「金海茂溪里支石墓の出土品—青銅器を伴出した新例—」（『東亜文化』第一輯、一三九～一五八頁）一九六三、ソウル。

⑩ 沢俊一「鏡箔出土の二遺蹟—朝鮮古蹟調査瑣談（一）」（『考古学』第八巻第四号）一九三七、東京。

⑪ 金永祐「細竹里遺跡発掘中間報告（二）」（『考古民俗』一九六四年四号、四九頁）ピョンヤン。

⑫ 李蘭暎「江陵市浦南洞出土先史時代遺物」（『歴史学報』第二四輯、一三六～一三七頁）一九六四、ソウル。

⑬ 白鍊行「泉谷里石箱墳」（『考古民俗』一九六六年一号）ピョンヤン。

⑭ 黄基徳「前掲書」四四～四五頁。

⑮ 梅原末治・藤田亮策『朝鮮古文化綜鑑』第一巻、四七頁、一九四七、天理。

⑯ 韓国国立博物館『一八・一五後蒐集—陳列品図鑑』一九六五、ソウル。翻訳解説は西谷正「朝鮮におけるいわゆる土壙墓と初期金属器について」（『考古学研究』第一三巻第二号、二八頁、一九六六、岡山）参照。

⑰ 有光教一「平安北道江界郡漁雷面発見の一箱式石棺と其副葬品」（『考古学雑誌』第三一巻第三号）一九四一、東京。

⑱ これまで、銅扣・銅釦などといわれてきたが、中国で多く用いられている銅泡という名称に統一したい。朝鮮では、豊龍里・新興洞など、出土状況や共存遺物がよくわかっているもののほかに、咸鏡北道羅津市草島（『羅津草島原始遺跡発掘報告』一九五六、ピョンヤン）や平安北道龍川郡新岩里（金用玕・李淳鎭「一九六五年度新岩里遺跡発掘報告」『考古民俗』一九六六年三号、三一頁、ピョンヤン）でも発見されている。豊龍里と羅津草島出土品は酷似している。伴出の土器や石棺墓の関係から、コマ形土器ないし無文土器文化の所産であることがわかる。新興洞・新岩里は、ともにコマ形土器と共伴している。

⑲ 徐国泰「新興洞コマ形土器住居跡」（『考古民俗』一九六四年三号、三八～三九頁）ピョンヤン。

⑳ 朝鮮科学院考古学研究所（朴文国・有光教一抄訳）「羅津草島原始遺跡発掘報告」（『朝鮮研究年報』第一号、八九～九〇頁）一九五九、京都。

㉑ 徐国泰「前掲書」四二頁。

㉒ 朝鮮科学院考古学研究所『江界市公貴里原始遺跡発掘報告』（『遺跡発掘報告』第六集、八六頁）一九五九、ピョンヤン。

㉓ 朝鮮科学院考古学研究所『会寧五洞原始遺跡発掘報告』（『遺跡発掘報告』第七集、六七頁）一九六〇、ピョンヤン。

㉔ 佟柱臣「吉林的新石器時代文化」（『考古通訊』一九五五年第二期、八頁）北京。

四　初期金属器の歴史的位置

前節で資料を羅列してきたところによって、朝鮮における金属器の出現が、朝鮮古代史のなかで、いかなる段階に位置づけられるかを考えてみよう。

そこで、まずあげられるのは、平安北道美松里遺跡上層の知見である。そこでは、コマ形土器とともに銅斧が出土し、前記したような磨製石器を共伴している。黄海北道新

興洞遺跡の住居跡でも、銅泡がコマ形土器その他、磨製石器と伴出した。平安南道金灘里遺跡の住居跡から出た銅鑿や、黄海北道上梅里遺跡の石棺墓から発見された銅鏃と共存した各種の磨製石器は、コマ形土器文化のなかに見出しうる。また、コマ形土器文化の墓葬である石棺墓や支石墓からも銅利器が出ている例は、右の上梅里石棺墓（銅鏃）・豊龍里石棺墓（銅泡）の例のほかに、黄海北道泉谷里石棺墓や黄海北道御水区支石山支石墓からの細形銅剣の出土例をあげることができる。細形銅剣に関しては、朝鮮のコマ形土器のあるものと酷似する土器が、中国の遼寧省旅大市旅順口区尹家村遺跡の第一二号墓から出土し、それとともに、細形銅剣も見つかっている。[1] 以上のような事実は、先きにあげた遺物のうち、銅斧・銅泡・銅鑿・銅鏃などが、コマ形土器文化に属することを証明してくれる。

一方、咸鏡南道永興邑遺跡・慶尚南道茂溪里支石墓・江原道巨津里遺跡・慈江道豊龍里石棺墓・咸鏡北道羅津草島遺跡あるいは会寧五洞遺跡などは、コマ形土器とは異なった無文土器を出土する遺跡である。この無文土器とコマ形土器を比較すると、両者に類似性も見出せること、また、大陸的な磨石器を共伴することなどから、二者の同時性が首肯できる。コマ形土器は、平安道・黄海道を中心として、京畿道・慶尚道・咸鏡南道・忠清南道でも知られている。無文土器は、咸鏡北道をはじめ東海岸地方、ないしは南鮮に多く分布している。もちろん、二者の土器を詳細に分類し、また、編年も行なえば、さらに細かい地域性や相関関係も明らかになるであろうが、現在の日本における研究の段階から、ごく大雑把に言えば、少なくとも西海岸地方のコマ形土器文化と、東海岸地方の無文土器文化の二類型が設定できる。そして、両者の関係は、櫛歯文土器文化における長卵形土器文化と平底土器文化の二類型とも対応してくる。櫛歯文土器の終末期における様相や土器に随伴する文化内容が、コマ形土器ないし無文土器文化に継承されている点も少なからず指摘できる事実から言って、右の見解の妥当であることがわかる。中国遼寧省付近において、形態だけでなく、広口壺と長頸壺の組み合わせの点でも、コマ形土器に酷似する土器に、朝鮮にもある青銅器を伴なっていることから考えると、朝鮮において、櫛歯文土器文化から、コマ形土器ないし無文土器文化に移行したときから、

青銅器が出現したことが考えられる。

ところで、さきにあげた資料をみると、金難里の銅鑿は朝鮮独特の形式をもっている。中国をはじめ北方周辺地域のものは、ほとんど着柄部に銎をもつ形式であるが、金難里例のような扁平な形式は、稀有なものである。同じような形態をし、また、用途からいっても同じ機能を果たすものは、磨製の扁平片刃石斧に相当する。この事実は、銅鑿が磨製扁平片刃石斧に由来し、また、朝鮮で製作されたことをも推測させることになる。朝鮮で当初から青銅器が鋳造されたかどうかの問題については、これまたさきに資料を例示した事実、すなわち、永興邑の斧范、将泉里・草芙里での剣范、巨津里の鏃范、永興邑の鐸范などの諸例によって、鋳造による製作が実証される。[2]

銅泡については、鎔范が咸鏡北道鐘城郡三峯里の石器時代遺物散布地で採集されている[3](図10)。長さ約四・五cm、幅約三・五cm強、厚さ約一cm余の長方板の二面に范がある。一面のものは半球形であるが、他面のものは八角形の各辺が若干内湾する平面形をなし、半球形に近い曲面には八本の稜線が放射状に走るものである。そのうえ、全体に小形であることもあわせ比較すると、楽浪漢墓からの出土品に近いものである。しかし、石器時代遺物散布地において採集されたことや、楽浪郡時代の遺跡をもたない咸鏡北道にあっては、漢の楽浪郡時代のものでなく、コマ形土器併行の無文土器文化の所産と考えることには蓋然性が強い。さきの銅泡の諸例の鎔范として関連づけることも可能であろう。これら各種の鎔范に関連して想起されるのは、羅津草島遺跡の第一発掘坑の第一〇穴より出た青銅の鎔滓のかたまり二個のことである。[4]これについても、周辺から鉄製品の破片が少なからず存在したという。その中にやや時代の降りるものもあるというので、この鎔滓をもってにわかに無文土器文化における青銅器の鋳造と結びつけることは避けたいが、記憶しておいてよい事実といえよう。このように見てくると、銅斧・銅泡のなかには、朝鮮の周辺からの輸入品もあろうが、大部分の青銅器はかなり早い段階から、朝鮮において製作されていたことになってくる。

鉄器についても、会寧五洞遺跡出土鋳造鉄斧のような鎔范は、平安南道甑山郡と大同郡斧山面で知られている。

このように、技術的には青銅器さらにはまた鉄器の製作

が可能な段階になっていたが、原料の不足などの理由で、コマ形土器および無文土器文化にあっては、金属器の充分な発展は見られていない。それは、各種の磨製石器が豊富に使われ、また、次に示すような青銅器を模倣した石製品あるいは土製品があることからうかがわれる。初期金属器文化の段階において、金属利器が原料や技術の不足を補うものとして石製化されることは、ヨーロッパや東アジアなどでしばしばみられる。とくに、銅剣を石で模倣してつくった石剣は、朝鮮において著しく発達した。その間の事情は、有光教一博士の詳細な研究[5]によって知ることができる。

両翼有茎石鏃は、上梅里石棺墓出土の銅鏃と形態的に酷似し、遼寧方面の青銅短剣墓出土銅鏃などとの関連から発生したものと考えられる。この石鏃は、特異な形態で実例は少なく、慈江道江界市公貴里[6]、慶尚北道慶州市付近[7]など二、三の遺跡で知られるにすぎない。

星形斧は、棍棒頭として使用されたと考えられる多頭石器のことをいう。これには二種あって、扁平な環石の周縁に、長短さまざまな数個の突起をもっているもの（放射型）と、猿岩里出土のもののように、突起が上下二段に付されているもの（塊状型）とに分けられている[8]。とくに、塊状型の多頭石器については、水野清一博士によって、綏遠青銅器のなかの青銅製棍棒頭類との密接な関係が推定された[9]。この特異な星形石斧が、青銅製品を模倣したものであることは充分考えられる。以上のような石製品ばかりでなく、土製化もされたようである。咸鏡北道茂山邑虎谷では、銅泡を模したと考えられる泡形土製品（図6）が出土している[10]。

さて、朝鮮青銅器の出土状況を見ると、墳墓からの出土が圧倒的に多く、住居跡からの発見は僅少である。墳墓からの発見の場合に限って言えば、とくに青銅器を含むものが、際立った存在をなすものはない。

その点で、やがて土壙墓が築造されるようになると、多種多様の金属器の集中化が目立ってくるが、その状況と比較して、前段階にあたるコマ形土器ないし無文土器文化における社会構成が、原始共同体的な性格をもっていたことを推定させる。また、住居跡のあり方から見ると、いくつかが集合しており、農耕を生産基盤とすることからくる一つの地縁的な共同体が、櫛歯文土器時代以来の氏族的な結

合のうえに形成されていたことがうかがわれる。ところが、支石墓とくに北方式の場合を例にとると、北方式支石墓が一個所に群在するところが少なくない。その場合にその数は多く[11]、一個所に三～一〇基が群集することが最も多い[12]。また、群在するもののなかには、特に大形のものが少なくない[13]。石棺墓については、一遺跡に一、二基の割合で発見されることが多く、一遺跡に三基以上密集しているのは北方式では楚臥面の三基位のことである[14]。支石墓の被葬者とその支石墓を生みだした集落構造との関係はわからないが、三上次男博士は「元来北方式支石墓は巨石を組合せ積み上げて構築するものであるから、その築造のための大きな労働力を要したであろうことは、筆者の前々から述べている通りである。しかも、北方式支石墓は南方式と異り、個人墓であるのであるから、これを築造しえた人物は、相当大きな権力の所有者としなければなるまい」と考えている。しかし、支石墓がつくられているからといって、直接的に権力者に結びつけることはできない。仮りに一つの竪穴式住居が単婚家族からなるものと考える場合、そのうちの一人例えば戸長が支石墓に葬られるとしても、彼は階級的な権力者とはいえない。また、一単婚家族では築造するだけの労働力をもたず、他の家族の助力を要したとしても、その被葬者をただちに権力者とは言えない。要は単婚家族間の関係が問題であって、その関係が対等のものであり、相互扶助的に支石墓を築造することもありうるのである。このことを考古学的に実証することは難しいが、初期農業の段階では、原始共同体的社会構成で、支石墓の築造も個々の共同体成員の墳墓として、共同体的労働として行なわれることもありうる。しかし、このような原始共同体の段階でも、共同体から民主的に選ばれた首長の存在は充分考えられる。その機能としては、原始農業経営の指揮者、農業祭祀の司祭者、あるいは、他の集団との外交官などである。このような首長も生産力の発展にともなって、個人的な富をこやし、やがては階級的な支配者となっていくことが考えられる。こうした首長から支配者への変化の過程で、群在する支石墓のなかに、ひときわ大形のものを生み出していくのではなかろうか[15]。さきにみた金属器の資料に関する限りは、金属器が首長墓的なものと結びついていないが、金属器が多くの磨製石器にまじって散見してくることは、

こうした首長や支配者が、他の集団とくに、北方的な遊牧民との接触の場合に、共同体の代表者として事にあたり、その際に、記念品的に[16]金属器の一部を手に入れ、また、その過程で新しい金属器への欲求も出てくるのではなかろうか。

次に、初期の青銅器の種類を見よう。さきに資料を例示したように、僅かな資料のなかでは、銅泡や銅鐸など、装飾品的ないし祭祀品的なものがもっとも多く、次に、銅鏃・銅斧・銅剣などの武器類があり、銅鑿のような工具はもっとも少ない。ましてや、農耕関係の金属器は皆無で、経済生活につながる直接的な生産用具としては使用されていない。そこに、金属器の受容のしかたに問題がある。一般的な生産用具は磨製石器であって、金属器は僅少なものであった。その稀少性が、金属器をして儀器的な方向へ昇華させる結果となり、したがってまた、上にみたような共同体首長の所有物となっていったのであろう。

解放後の朝鮮考古学界において、青銅器時代の存否が問題となり、結局、新石器時代に継起して、青銅器時代が設定されるにいたった。その間の事情については、充分理解できないが、金用玕博士の考え方[17]を例にとれば、細形銅剣を使用した住民はすでに鉄器時代の住民であると考えている。そして、慈江道豊龍里で銅泡を出した石棺墓と酷似する吉林省騒達溝の遺物綜態については、騒達溝山咀子の鉄の痕跡だけでは、青銅短剣を出す墳墓とは同一でないとして、それを青銅器時代の所産として示唆している。したがって、騒達溝の文化綜態と親縁性のある美松里上層すなわちコマ形土器文化を青銅器時代と考え、青銅短剣墓を鉄器時代の所産として対比させている。[18]金用玕博士の考え方の背景には、青銅器時代から鉄器時代へという世界史的なシェーマに当てはめようとする意図に影響されているように考えられる。しかし、なるほど豊龍里や騒達溝の石棺墓と、青銅短剣墓とは、同一でなく、大いに相違点を認めるが、それは被葬者の性格が歴史的な過程を経て変質した結果である。だからといって、石棺墓を青銅器時代とし、青銅短剣墓を鉄器時代と考える必然性はない。騒達溝山咀子一号棺は、前にもふれたように、鉄器の痕跡ばかりでなく、鉄器そのものの破片が出土している。また、青銅短剣墓についても、鉄製利器とともに、青銅利器も含んでいる。金用玕博士の

論法でいけば、コマ形土器文化における僅かな青銅器やその痕跡からだけでは、青銅器時代の設定が困難になってくるのではなかろうか。青銅器時代を規定するためには、有光教一博士が指摘しているように、金属器の原料を不断に供給し、専門工人を独立させ、また、一定の供給ルートがあるような社会機構をもち、また、金属器が利器の大部分を占めるような状況になったとき、はじめて青銅器時代とか、鉄器時代とかいえるのである。技術史を論じる場合はともかく、とくに、中国文明の周辺地域にあって、ヨーロッパ流の青銅器時代とか鉄器時代という問題を論じることはあまり意味のあることではないと思う。むしろ大事なことは、金属器の出現や進歩の過程とか、その結果、社会の発展にどう有機的に関連するかといった問題を議論すべきではないかと思う。

① 金用玕・黄基徳「紀元前千年紀前半期の古朝鮮文化」(『考古民俗』一九六七年二号、三頁)ピョンヤン。

② このほか、平安北道寧辺郡梧里面細竹里(鏃)、京畿道高陽郡元堂里(矛)、全羅南道霊厳郡霊厳面(戈・剣・斧・鑿など)等々において、鎔笵が発見されているが、それらは朝鮮青銅器の発展期のものと考えられるので、起源問題からは一応除外しておく。

③ 黄基徳「咸鏡北道地方石器時代の遺跡と遺物(2)」(『文化遺産』一九五七年二号、六三頁)ピョンヤン。

④ 朝鮮科学院考古学研究所(朴文国・有光教一抄訳)「羅津草島原始遺跡発掘報告」(『朝鮮研究年報』第一号、九〇頁)一九五九、京都。

⑤ 有光教一『朝鮮磨製石剣の研究』(『京都大学文学部考古学叢書』第二冊)一九五九、京都。

⑥ 朝鮮科学院考古学研究所『江界市公貴里原始遺跡発掘報告』(『遺跡発掘報告』第六集、図版一八の九)一九五九、ピョンヤン。

⑦ 斎藤忠「慶州付近発見の磨石器」(『考古学』第八巻第七号、第一図八)一九三七、京都。

⑧ 田村晃一「朝鮮半島の角形土器とその石器」(『考古学研究』第一〇巻第二号、一〇頁)一九六三、岡山。

⑨ 水野清一「塊状多頭石器」(『人類学雑誌』第五〇巻第五号)一九三五年、東京。

⑩ 黄基徳「茂山邑虎谷原始遺跡発掘中間報告」(『文化遺産』一九六〇年一号、六九頁)ピョンヤン。

⑪ 三上次男「衛氏朝鮮国の政治・社会的性格」(『中国古代史の諸問題』所収、二二一頁)一九五四、東京。

⑫ 三上次男『満鮮原始墳墓の研究』七六頁)一九六一、東京。

⑬ 三上次男「衛氏朝鮮国の政治・社会的性格」二二一頁。

⑭ 三上次男『満鮮原始墳墓の研究』六〇四頁。

⑮ 西谷正「朝鮮における墳丘の形成」(『歴史教育』第一五巻第三号、六〇頁)一九六七、東京。

⑯ 銅泡を例にとると、もともと馬具の飾金具として、面繋などに飾りつけられたもので、中国の殷代から始まり、後漢にも見られるものである。もちろん、同時代の北方地方にもしばしば見られるものである。面繋などの飾金具として、多数がセットとして使われるのが普通であるが、朝鮮の場合、ほとんど単独の出土であって、本来の機能を

離れて宝器的あるいは記念品的になってきているのではないかと思う。

⑰ 金用玕（李進熙訳）「美松里遺蹟の考古学上の位置―年代論を中心として―」（『考古学雑誌』第五〇巻第一号、六六頁）一九六四、東京。

⑱ 西谷がかって発表した論文（「朝鮮におけるいわゆる土壙墓と初期金属器について」『考古学研究』第一三巻第二号）のなかで、細形銅剣の時期について、初期金属器という言葉を使用したことに対して、最近、金用玕・黄基徳両博士から、いまだに、以前の帝国主義御用学者の古い「学説」を踏襲しているとして批判を受けた（金用玕・黄基徳「前掲書」一三頁）。私が初期金属器といったのは、鉄器が完全に普遍化する三国時代の前段階における、初期の金属器全般を包括する意味で使ったのである。もちろん、コマ形ないし無文土器時代のある段階から、鉄器が出現してくると想像されるが、コマ形ないし無文土器時代の詳細な編年が確立していない現在、いつから鉄器時代に入るかを明らかにしえないので暫定的に使用している。また、本文で述べた理由から言っても、青銅器時代あるいは鉄器時代の云々はあまり意味のあることではないと思うからである。

五　金属器の系譜とその背景

次に、これまで見てきたような金属器ないしは、その影響のもとに生まれた磨製石器の系譜について考えてみたい。

銅鑿については、すでにふれたように自生ないし朝鮮での製作品の可能性が強いので除外するとして、美松里発見の銅斧は、類似のものが吉林省・遼寧省・内蒙古自治区において認められる。すなわち、その遺跡を列挙すれば、吉林省樺甸県二道甸子石棺墓①・吉林省騒達溝石棺墓②、内蒙古自治区昭烏達盟赤峰市紅山後第一住地③（鎔笵）・内蒙古自治区昭烏達盟寧城県南山根④、遼寧省撫順市大貯房石棺墓⑤・遼寧省牧羊城官屯子墾周墓及び劉家疃石室⑥・遼寧省西豊県東善郷執中村西岔溝⑦・遼寧省錦西県烏金塘⑧・遼寧省旅大市旅順口区后牧城駅石室⑨・遼寧省沈陽市鄭家窪子第一地点⑩・遼寧省朝陽県十二台営子竪穴式石室⑪などである。銅斧そのものの類似品は、管見にふれただけでもかなりの例が知られる。

そこで、銅斧を出土した遺跡を通観すると、その中には大体二つの異なった性格の遺跡に分けられる。たとえば、吉林の二道甸子・騒達溝、遼寧の大貯房などでは、磨製石器を伴出するが、その点では朝鮮の美松里と共通し、石棺墓という点でも、美松里を含む朝鮮コマ形土器文化の墓制と共通性が見られる。内蒙古赤峰紅山後の場合、磨製石器と斧笵を出した第一住地に対応する石棺墓が知られている。遼寧・内蒙古・吉林の銅斧を出した石棺墓は、朝鮮の同種のものと比較したとき、銅斧のみならず、伴出の磨製石器や石棺墓という墳墓形式においても、文化綜態的に共通性

がみられる。これに対してもう一方の、内蒙古の南山根、遼寧省の牧羊城・烏金塘・后牧城駅・十二台営子などは、朝鮮のものとは、銅斧そのものにおいても多少の相違を認めるが、純粋の青銅器文化である。墳墓形式についても、石室・土壙墓などであって、朝鮮のコマ形土器文化の墓制とは綜態的に相違するのである。

このような関係は、銅泡についても言えることである。磨製石器を伴出し、石棺墓などを墓制とする朝鮮コマ形土器文化と共通する性質の遺跡をあげると、吉林省騒達溝、内蒙古赤峰市紅山後石棺墓などがある。一方、青銅器のみを出す遺跡から銅泡を出しているのは、先にあげた諸遺跡のうち、内蒙古の南山根、遼寧省の烏金塘・后牧城駅・鄭家窪子第一地点・十二台営子などで認められる。

銅鏃で上梅里例と同型式のものは、磨製石器文化遺跡系では、赤峰紅山後の石棺墓が知られる。それに対して、青銅器文化遺跡系では遼寧の十二台営子・牧羊城において求められる。[12] そのほか、ほぼ同じ頃かやや遅れて、朝鮮で現われる細形銅剣や多鈕細文鏡についても、その起源が遼寧付近の満州式銅[13]剣や十二台営子第三号墓の多鈕銅鏡に認められることからも明らかである。このように、青銅器に関して、朝鮮コマ形土器文化における同様に、磨製石器を伴出し、石棺墓を築いた遼寧や吉林の新石器文化と朝鮮コマ形土器文化には共通性が指摘できるわけである。

個々の石器をとりあげても、例えば断面菱形の刃部に同じくらいの長さの茎部をもった磨製石鏃が、朝鮮黄海北道の御水区・楚臥面の石棺墓などで出土しているが、[14] 同型式のものが、吉林省蛟河県の石棺墓から出土している。土器についても、豊龍里石棺墓出土の土器と、赤峰市紅山後や貔子窩高麗寨出土品との間に類似の認められることは古くから指摘されている。[15] 最近でも、平安北道墨房里や江原道の変形支石墓群から出る美松里型の長頸壺形土器と同形式のものが、吉林西団山子石棺墓からも出土することが注意されている。[16] これらの事実は、内蒙古から遼河流域と、細石器文化以来の共通の基盤と伝統の上に立ち、遼河流域を分布の中心として波及してきた中国磨製石器文化の影響で、石庖丁・磨製石鏃をはじめとする精巧な磨製石器をもつようになった段階において、金属器文化と接触することによって、金属器を部分的に所有していったことを示唆してい

る。その金属器文化とは、遼寧・吉林・朝鮮にかけて、磨製石器とも共存した、銅泡・銅斧・銅鏃などを含み、遼寧を中心として分布する先にあげたいくつかの青銅器文化系の遺跡群である。いずれも「満州式」の青銅短剣をはじめ、豊富な青銅器をもっている。石室や土壙墓に随葬された遺物をみると、兵器・馬具・装飾品・漁猟用具や、手工業工具などをもっている。それらの被葬者が、漁撈・遊牧を主とした生活をしていたことが推測され、自然環境に強く依存する生活から遊牧的な種族であったこともうなづける。[17]

これら遊牧的な青銅器文化は、さらに北方から移動してきた青銅器文化が中原地方や[18]スキタイ地方との接触によって成立し、発展し、また、周辺にも影響を与えたことをいくつかの事実は物語ってくれる。[19]十二台営子と后牧城駅を比較すると、前者が青銅器を中心として、多鈕鏡も含んでいるが、後者には戦国後期の遺物や鉄器もあることから、十二台営子から后牧城への発展ないし時間的経過を考えることができる。遼寧の西岔溝でも、細石器文化の基盤の上にあったスキタイ系の遊牧民が、中原の漢文化との密接な接触をもったことがわかる。また、内蒙古自治区呼倫貝尔盟陳巴爾虎旗完工では、土壙墓から、細石器文化遺物と中原地区的な銅器や鉄器が共存している。[20]こうした過程で、遼寧付近に遊猟していた青銅器文化が、内蒙古や吉林や朝鮮の磨製石器文化に影響を与えたものと思われ、朝鮮コマ形土器文化も、こうした遊牧的青銅文化との接触によって金属器を受容していったと考えたい。[21]

① 康家興「吉林省樺甸二道甸子発現石棺墓」（『考古通訊』一九五六年第五期、四四～四五頁）北京。
② 佟柱臣「吉林的新石器時代文化」（『考古通訊』一九五五年第二期、八頁）北京。
③ 浜田耕作・水野清一『赤峰紅山後』（『東方考古学叢刊』甲六）一九三八、東京。
④ 李逸友「内蒙昭烏達盟出土的銅器調査」（『考古』一九五九年第六期、二七六～二七七頁）北京。
⑤ 孫守道・徐秉琨「遼寧寺幾堡等地青銅短剣与大型石棺墓」（『考古』一九六四年第六期、二八二頁）北京。
⑥ 原田淑人・駒井和愛『牧羊城』（『東方考古学叢刊』第二冊）一九三一、東京。
⑦ 孫守道「匈奴西岔溝文化古墓群的発現」（『文物』一九六〇年第八・九期、二六～二七頁）北京。
⑧ 錦州市博物館「遼寧錦西県烏金塘東周墓調査記」（『考古』一九六〇年第五期、七頁）北京。
⑨ 旅順博物館「旅順口区后城駅戦国墓清理」（『考古』一九六〇年第八期、一四頁）北京。

⑩ 瀋陽市文物工作組「瀋陽地区出土的青銅短剣資料」(『考古』一九六四年第一期、四四～四五頁) 北京。

⑪ 朱貴「遼寧朝陽十二台営子青銅短剣墓」(『考古学報』一九六〇年第一期、六三～七一頁) 北京。

⑫ 燕下都城址や、さらに漢代にも降りるものもある。

⑬ コマ形土器文化における磨製石剣も、満州式銅剣との関係で生まれたものと考えられる。そのことは、満州式銅剣を模倣したと思われる大長山島上馬石貝塚出土の骨剣と朝鮮の磨製石剣との類似からもうなづける。

⑭ 匡瑜「吉林蛟河県石棺墓清理」(『考古』一九六四年第二期、七五頁) 北京。

⑮ 有光教一「平安北道江界郡漁雷面発見の一箱式石棺と其副葬品」(『考古学雑誌』第三一巻第三号) 一九四一、東京。

⑯ 都宥浩(鄭漢徳訳)「朝鮮原始考古学(四)」(『考古学研究』第一二巻第三号、二六頁) 一九六五、岡山。

⑰ 朱貴「前掲書」七〇～七一頁。

⑱ ソ連のアンドロノーヴォ文化やカラスク文化の中国北方との交流をさしている。

⑲ 例えば、青銅短剣についても、陝県上村嶺・洛陽中州路墓中出土の西周末・春秋時代の柱脊剣との関係が説かれている(孫守道・徐秉琨「前掲書」二八二～二八三頁)。

⑳ 内蒙古自治区文物工作隊「内蒙古陳巴爾虎旗完工古墓清理簡報」(『考古』一九六五年第六期) 北京。

㉑ この背景には、北方遊牧民と中国中原の農耕民との間の政治的な動きと関連するかもしれないが、推測の域を出ないので、今後の問題として残しておく。

六　金属器開始の年代

最後に、金属器開始の年代についてふれておこう。まず、銅鏃・銅斧・銅泡などのセット関係において、朝鮮青銅器の直接の系譜が求められる遼寧省后牧城駅遺跡では、明刀銭の出土がみられるところから、一応、戦国に年代の一点が推定される。遼寧付近の銅鏃についていうならば、中国では殷から戦国にかけて見られるようであるが、とくに、洛陽中州路(西工段)二四①一五墓四出土のⅠ式鏃や上村嶺虢国墓出②土銅鏃に類似する。中州路は、春秋初～中期に、上村嶺は西周晩～東周早期に比定されている。満州式銅剣への影響を与えたと思われる脊稜剣も同時期のものなので、遼寧付近の青銅短剣墓の年代の上限を春秋前半頃に考えられる。とすると、その影響をさらに受けた朝鮮コマ形土器の年代は、それより降って上限が求められるわけである。銅泡も中国では殷から漢代頃まで知られるが、とくに朝鮮の銅泡に酷似のものは夏家店上層文化にあって、春秋～戦国頃に比定されている。このような年代観は、さきに朝鮮青銅器の系譜を求めた遼寧・内蒙古自治区・吉林の諸遺跡の

年代から見ても妥当である。

ここで、同じ遼寧省十二台営子と后牧城駅を比較してみよう。両者は成対短剣を含む青銅器を主としている点で共通している。十二台営子では多鈕鏡など非中原的な遺物を含むが、后牧城駅では鉄器を含み、蓋弓帽・明刀銭など中国的な色彩が出てきている。后牧城駅が戦国併行であるに対して、十二台営子は若干古い様相を示しており、戦国を遡る可能性がある。したがって、これらの影響を受けた朝鮮での金属器の初現は、いかに古く考えても、春秋の前半すなわち西暦紀元前七～八世紀頃を遡りえず、その頃から戦国ないし、それをあまり遡らない頃にかけて、金属器出現の年代を考えたいと思う。

朝鮮青銅器の年代観について、一九五六年一二月に朝鮮科学院考古学及民俗学研究所で行なわれた「朝鮮における金属文化起源」に関する種々の討論の結果、大体の意見は、朝鮮における青銅器使用開始を紀元前七～六世紀におかれたといわれるが、[3]その後の研究の一つである金用玕博士の意見によると、[4]騒達溝石棺墓から出た青銅刀は、河北省雹神廟の青銅刀の鎔笵と形態がよく似ている。その雹神廟の遺物については、安志敏が問題の鎔笵でつくった青銅器と雹神廟遺跡に隣接する賈各荘の戦国時代の墳墓から出土した青銅器が形態上著しく違う点を根拠に、春秋時代より下ることはないとのべた見解に対して、金用玕博士は、騒達溝出土の他の遺物や、吉林一帯の墳墓から出土した遺物についての検討を通じて出されていて、妥当な考えであると賛意を示している。また、騒達溝の一墳墓やそこと隣接する土城子の石棺墓から出土した連珠状の青銅装飾品は、いわゆる綏遠青銅器や、さらには、南シベリアのカラスク文化にもよく見られる。「南シベリア古代史」の著者キセロフが周辺の多くの遺跡との対比研究を通じて、カラスク時期を紀元前一二〇〇～七〇〇年と推定したこと、また、カラスク文化や「綏遠青銅器」に豊富な青銅製の泡が、豊龍里の石棺墓から出土したのを、偶然なできごととはいえないとして、美松里型の壺の出土する朝鮮西北部の一連の遺跡および美松里遺跡と関連させて論じた慈江道一帯の青銅器時代遺跡の年代を、少なくとも紀元前一〇〇〇年代前半期の範囲内にみなければならないことを意味すると言われる。さらに上述した各遺跡の間でも前後関係があり、あるもの

は紀元前二〇〇〇年代に遡ることもありえようと言っている。しかし、銅泡・銅斧は明刀銭を出した青銅短剣墓との関連から言えば、戦国頃あるいはそれを遡ることはすでに指摘した通りである。連珠形青銅装飾品についても、夏家店上層文化に属し、東周に比定されており、先の騒達溝銅刀と同じものを出した南山根もこの文化に属している。[5] たしかに、連珠状青銅装飾品がカラスク文化に見られるし、また、河北省唐山市小官荘石棺墓から出た銅耳環についても、中国から発見されず、シベリアのオビ川流域のカラスク期遺跡から発見されていて、この装身具がスキート・シベリア系北方文化の系統に属することは明らかであろう。[6] しかし、石棺墓文化がいろんな文化の影響を受けていることの説明にはなっても、直接の影響を受けたとは言えない。このことは文化綜態の比較において考えるべきで、そのことからもさきの戦国ないし東周墓との関係の方に蓋然性の多いことは認められよう。カラスク文化と中国北方との交渉は事実であったとしても、かえって、そのカラスク文化期のミヌシンスクの墳墓副葬品の中には、北中国起源の侵入民族によって、イェニセイに持ち込まれたものがあり、カラスク人の人種的特徴からも、北中国起源が強調されている。[7]

金元龍博士は、[8] 遼寧省十二台営子墓の発見を契機として、遼寧地方の石棺墓青銅器文化の朝鮮への流入の問題にふれている。その年代は、石棺墓に遅れる土壙墓の年代を決めることによって遡及している。つまり、土壙墓が楽浪開始期より先行して始まったとしても、そんなに遡ることはなく、西暦紀元前一〇八年を遡ること一〇〇～二〇〇年程度と推定した。さらに、土壙墓の北朝鮮流入を衛満の入朝とほとんど近いことと推定し、実年代を長く取っても西暦紀元前四、三世紀以前に遡らず、したがって、土壙墓より以前にあって、あまり長く存続していない青銅器時代は、五、六世紀以前を遡らないとしている。そして、十二台営子の銅鏡文様の祖形である戦国式鏡の実年代の上限を、カールグレンの説にしたがって、西暦紀元前五世紀頃として、朝鮮の土壙墓やそれに先行し、十二台営子の影響と考える石棺墓の年代の上限を決めようとしたわけである。私の考え方とは、結論においてはそれほど違わないが、論証の過程においてはかなりの相違がある。

三上次男博士は、赤峰紅山後の石棺墓とそれに関連のある住居跡の年代について、浜田耕作博士らが比定した秦漢時代説を否定している。[9] すなわち、(1)紅陶は、中国内部では、彩陶や黒陶と併出するほど古く、堅緻な灰陶時代になるともはや姿を見せないこと、(2)赤峰紅陶文化の内容は、オルドスを中心とする内陸アジア青銅器文化ときわめて密接な関係をもっているといわれるが、そのオルドス青銅器文化の開始年代が、春秋時代あるいはそれ以前とも推測されうるとして、前一千年紀初頭前後から存在すること、従って、赤峰遺跡を戦国末や漢初に釘づけする力はないこと、(3)早くも春秋時代に熱河南部に中原文化の進出したことは、一九五五年五月に赤峰に近い凌源県から、西周時代の銅器が計一六個も出土したことによっても確実であるから、[10] 同じ頃中原文化と、これに近い赤峰の紅陶文化が何らかの接触をもったと考えてもあえて不思議ではないとして、赤峰紅山後の石棺墓は前一千年紀の前半のある時期には、姿を見せていたと考えている。さらに、中国東北地方での石棺墓の出現を前千年紀の中期に遡行している。[11] しかし、赤峰紅陶文化を前一千年紀まで遡らせることには異存はないが、それをもって、紅陶を出した第二住地の年代よりも一時期新しいと考えられる、第一住地やそれに属する石棺墓の年代を、前千年紀まで遡らせることは不当である。赤峰紅山後第二住地で見られた土器の一つである、連続弧線文は、内蒙古昭烏達盟巴林左旗[12]をはじめ、東南蒙古でも見られる。[13] 朝鮮では、[14] 美松里下層から出土しているので、美松里下層より新しい、上層のコマ形土器文化の年代は、それより下りることになって、美松里の銅斧を含めて、朝鮮青銅器の年代が、先の戦国ないし、それをあまり遡らないとする年代に接近してくる。金属器が出現してくるコマ形土器文化の年代については、下限の一点が次のような事実によってわかる。すなわち、コマ形土器が平安南道台城里遺跡の第四号土壙墓から出ている。土器は封土中から採集されたもので、ほかに石庖丁・石剣・石鏃などの磨製石器が発見されている。これについて報告者は、封土用の土を採取する場所で、原始時代遺物等が土にまじって混入したものか、あるいは第四号墓の下部にあった竪穴式住居跡と関連があって、封土築造の際に削平されて混入したものとしている。[15] いずれにしても、これらの遺物がこの古墳よりも以前のも

のであることは間違いない。この土壙墓の年代については、その出土品である深鉢形土器や石板・帯鉤において、平安南道大同郡石巌里の王旰墓出土のそれと酷似[16]している。王旰墓の年代は、永平一二年銘漆器（西暦六九年）の出土からそれ以後となる。このことから、台城里土壙墓が西暦一世紀の末頃に比定され、したがって、コマ形土器の年代の一点も西暦一世紀以前ということになる。

朝鮮における鉄器の使用開始時期については、鄭白雲が燕など戦国の流民との関係において考えようとして、戦国併行の時期に考えているが[17]、中国における鉄器の開始が春秋晩期から戦国早期に考えられていることを考慮に入れると、燕の流民など戦国の末、秦漢に限らずとも、それより以前の戦国代に、遊牧民を媒介として、朝鮮に鉄器の入っていることも可能性として想定できる。ただし、年代の一点については、コマ形土器文化における青銅器の直接的な系譜関係にある后牧城駅の青銅短剣墓[18]のなかに、戦国の明刀銭とともに鉄器が入っていることによって、戦国の末頃の想定もなりたつ。会寧五洞の無文土器時代の住居跡から出土した鋳造鉄斧は、明らかに戦国の影響を受けたものと考えられるが、その年代をさらに限定することは困難な現状にある。

① 中国科学院考古研究所『洛陽中州路（西工段）』（『中国田野考古報告集』考古学専刊丁種第四号、一〇二頁、図七〇の一・二）一九五九、北京。
② 中国科学院考古研究所『上村嶺虢国墓地』（『中国田野考古報告集』考古学専刊丁種第一〇号、二〇頁、図一三）一九五九、北京。
③ 李進熙「戦後の朝鮮考古学の発展―初期金属文化期―」（『考古学雑誌』第四五巻第一号、六一頁）一九五九、東京。
④ 金用玕（李進熙訳）「美松里遺蹟の考古学上の位置―年代論を中心として―」（『考古学雑誌』第五〇巻第一号、六九頁）一九六四、東京。
⑤ 中国科学院考古研究所内蒙古発掘隊「内蒙古赤峰葯王廟、夏家店遺址試掘簡報」（『考古』一九六一年二号）北京。
内蒙古自治区文物工作隊「一九五七年以来内蒙古自治区古代遺址及墓葬的発現情況簡報」（『文物』一九六一年九号、六頁）北京。
⑥ 三上次男『満鮮原始墳墓の研究』二九三頁、一九六一、東京。
⑦ アリェクサンドル・ミチューリン「南シベリアの古代文化(1)」（『古代学』第五巻第一号、九〇～九一頁）一九五六、大阪。
⑧ 金元龍「十二台営子の青銅短剣墓―韓国青銅器文化の起源問題―」（『歴史学報』第一六輯）一九六一、ソウル。
⑨ 三上次男『前掲書』二八七～二八八頁。
⑩ 陳夢家「西周銅器断代(二)」（『考古学報』第一〇冊、九九～一〇二頁）一九五五、北京。
⑪ 三上次男『前掲書』六七六頁。

⑫ 中国科学院考古研究所内蒙古工作隊「内蒙古巴林左旗富河溝門遺址発掘簡報」（『考古』一九六四年第一期、二頁）北京。

⑬ 江上波夫「新石器時代の東南蒙古」（『アジア文化史研究』論考篇、二一六頁）一九六七、東京。

⑭ 金用玕「前掲書」五八頁。

⑮ 朝鮮科学院考古学研究所『台城里古墳群発掘報告』第五集、二九～三〇頁）一九五九、ピョンヤン。

⑯ 原田淑人・田沢金吾『楽浪―五官掾王旴の墳墓』一九三〇、東京。

⑰ 鄭白雲（朴文国訳）「朝鮮における鉄器使用の開始について」（『朝鮮学報』第一七輯、一七八～一七九頁）一九六〇、天理。

⑱ 中国科学院考古研究所（杉村勇造訳）『新中国の考古収穫』一〇四頁、一九六三、東京。

⑲ 旅順博物館「旅順口区后牧城駅戦国墓清理」（『考古』一九六〇年第八期、一二～一七頁）北京。

（奈良国立文化財研究所技官）

the form of great landowners' possession of military power, but in the middle and at the end of Nan-song 南宋 among their subject peasants grew the movement of independence of minor management.

The so-called Prohibition Act of Tian-hu's 佃戶 Escape in this Lu 路 may be considered as an enforcement for reorganizing of the crisis in this preceding feudal system.

Robert Peel and the Catholic Emancipation

by

Kenji Muraoka

There are two famous episodes in Peel's career about which there always has been, and always will be, acute controversy.

The first is the Catholic emancipation in 1829. Down to that year Peel had been chiefly known as the strongest and ablest opponent of Catholic emancipation. In 1829, however, he himself introduced and carried, with the help of opposition votes, the very measure which he had so long and so consistently opposed. Was he justified in doing this?

The second episode is the repeal of the Corn Laws in 1846. In 1841 he was raised to the premiership as the leader of a party which had gained a majority at the election as being in favour of the protection of agriculture. In 1846, however, he, remaining Prime Minister, carried the repeal of the Corn Laws, again by the support of the Opposition, and against the intention of his party. Was he justified in doing this?

This paper chiefly deals with the first one, the subject of 'Robert Peel and the Catholic Emancipation'. It must be my great pleasure if this trial should be able to make some contribution to the controversial question as to whether Peel was justified in his doing in 1829.

Origin of Metalic Implements in Korea

by

Tadashi Nishitani

The appearance of metalic implements in Korea was in the culture

of top-styled or non-pattern pottery which succeeded to the comb-toothed pottery, using bronze tools generally with immediate appearance of use of iron tools. There is a strong possibility that bronze tools were manufactured from the beginning, but abundance of the stone tools copied after bronze ones means slow generalization of metalic tools.

In the background of establishment of metalic period existed the very society with the mair productive section of agriculture that was populated in the immense region of the *Liao-ho* 遼河 basin and interchanged with some nomadic societies accompanied with metalic tools; that is, the intrinsic development in the culture of top-styled or non-pattern pottery, on the common cultural basis of *nui-mêng-ku* 內蒙古 and *Liao-ho*, brought the appearance of metalic tools due to the new change of situation in *Chung-yüan* 中原 and the Northern District, the period of which was from the first-half of *Ch'un-ts'in* 春秋 in China, or 7 or 8 centuries B.C. to the limit, to *Chan-kuo* 戰国, or 3 or 5 centuries B.C..

The solution in the origination of metalic tools in Korea is related to external conditions in acceptance of metalic tools in the culture of Yayoi 弥生 in Japan.